

三郎山論集3（上田女子短期大学 日本語教育研究会・国語研究倶楽部共同機関誌）1996.3

## 日系子弟の日本語教育

中元 司 郎

「日本語の教え方を知っている事は、国際人の基本として重要な事になってきます」と日本語教師養成講座の宣伝に出ていました。皆さんがイメージする日本語教育は、国際人というイメージと重なっているかも知れませんが、主に南米の日本語教育は、かつて移住した日本人が移住先の国々で生まれ育った子供たちに「日本語」を伝え、日本文化を伝えるために始まったもので、先のイメージとは少し違ったものと言えます。

私が仕事をしている地域は、ブラジルの北部、パラ州の州都ベレンという町です。このパラ州には、日系子弟（移住した日本人の子供たち）が学ぶ日本語学校が10数校あります。最も小さい日本語学校は、生徒が4人、先生1人の学校で、最も大きい日本語学校は生徒が300人で、先生が7人の学校です。生徒の年齢は、3歳から60歳まで幅広く学んでいます。

最近までは、日本の国語教科書の内容を工夫して、こちらの子供たちに学習させていましたが、家庭の中で日本語が使われなくなってきている今、その国語教科書に代わる子供向けの日本語教材が必要になっています。日本語学校に通う子供たちは、学校だけで日本語に接するということに変化してきているので、限られた時間を有効に使える教材・教科書が必要です。

もう一つ重要なことは、日本語の分からない子供たちに、楽しく分かりやすい日本語を教える「教授法」を、先生方ができるだけ早く習得することだと言えます。

日本で盛んに出版されている日本語関係の書物も、簡単には手に入らないし、新しい教授法の情報も入らない中で、奮闘されている先生方のほとんどは、地域の人達から望まれてこの仕事に就かれた方々です。困難を承知で子供たちのために奮闘されている先生方のお一人が、本誌に寄稿されているカスタニャール日本語学校の桜井二子先生です。

桜井先生は、日本語に初めて接する幼稚部や初級のクラスを担当されています。経験豊かな方で、自分で工夫された教材を多くお持ちで、学校にとって、なくてはならない先生です。今年度（95年度）、国際交流基金の研修生に推薦され、日本での研修を受けられることになりました。帰国後の活躍が期待されます。

さて、南米の日本語教育を考える視点として、私は「継承と普及」という考えを持って指導に当たることが必要だと考えています。

「継承」とは、受け継ぐことですが、「継承語」という概念を基礎に持っている考え方です。ある国に住む少数民族がその文化的伝統を継承することの重要性を、国家的財産として認めたカナダでの研究は有名です。「多言語・多文化主義」とも「モザイク文化」とも言われるカナダにおける少数民族、彼らの持つ言語・文化の継承を奨励する国家的方針の中で認められてきた概念とも言えます。

南米に住む日本人が自分の文化的伝統を継承することにより、それぞれの国家に寄与することができるのだという信念が、日本語学校を移住と共に始めさせたと言えます。原始林の伐採を始める中で、学校の建設に取り掛かり、子供たちの教育においては、日本語と移住先国の言語を共に重要と考え、教育に取り組んだ先人たち。その歩みを理解することにより、文化の継承を考えてこそ「日系人」として成長することができるのだ、という移住者の願いをとらえることができます。日本語学校では、日本語の学習だけでなく、折り紙や日本の歌を子供たちは学んでいます。また、「学芸会」が地域の催しとして開催され、そこでは「おおきなかぶ」だけでなく、「桃太郎」や「浦島太郎」が演じられ、日本舞踊が必ずといっていいほど取り入れられています。このことを単に「郷愁」ととらえるのは、的を得ていないと言えます。

南米各国に住む日系人二世、三世は、その国の教育を受け、その国の文化を身につけるだけでなく、家庭や地域、そして日本語学校から日本の文化的伝統を受け継ぎ、日本をより親しい国と感じ、成長しています。日本とそれらの国の懸け橋である日系人は、日本が国際化していく上で、欠くことができない人的財産であると言えます。

次に、「普及」とは、広く行き渡らせることです。

日系人が住む地域社会の周りには、日本に関心を持つ多くの人が存在します。縁あって日系人と結婚した人や、日系人を知人や恋人などにもつ人々が日本語学校に通学するケースは少なくありません。日本の文部省や国際協力事業団の研修生を希望して、日本語を学び始める学生や社会人もいます。彼等も日本語を学ぶことにより、日本のこと（日本人の生活や習慣、日本の音楽や映画など）をより深く知りたいと思い、日本を親しい国と感じるようになります。

日本語学校は、その地域の小さな日本文化センターとも言える存在です。それにも関わらず、日本の文化を紹介できる様々なものが不足しています。日本語を学び日本を理解しようとしている人々に提供できるものを、私たちはもっと準備しなければならないと思い

ます。日本の家庭に埋もれている絵本や漫画、そしてビデオ・CDなどは、とても有用な物となります。日本の文化に接することにより、自分達の文化を振り返ることができ、異文化の理解と交流が可能になります。

南米の日本語学校は、「継承」と「普及」という重要な二つの事柄を担う文化施設であり、人材育成の場所と言えます。この北伯（北ブラジル）には、現在60数人の先生方と900人近くの生徒が日本語を学習しています。大アマゾンの流域には、多くの日系人がその足跡を残していますし、今も多くの人々が活躍しています。そして、将来、ブラジルと日本とを友好的につなぐことのできる人材が毎日学んでいるのです。

(なかもと しょう／JICA派遣日本語指導教師)

